

2 見えない社会を見る

－電車のなかの社会学－

2 電車のなかの社会学

今回の主題

—「社会」の存在に気づくためのレッスン—

- ①電車の車内を観察(想像)し、互いに見知らぬ人同士が出会う公共空間において、相互行為の秩序はいかに作り出されるのかを考えてみよう。
- ②親密空間における相互行為のあり方を考えてみよう。

KEYWORD

公共空間 親密空間 プロクセミックス (proxemics)
儀礼的無関心 (civil inattention/ civil indifference) 「違背実験」

日常生活と空間

・われわれの社会的経験は多くの場合日常的慣例(ルーティン)の経験であり、これが一定の時間持続する一つの枠組を「構造(=行動の
パターンのネットワーク)」という。

「親密空間」

その空間に入るための資格が厳しく制限されていて、結果としてお互いによく知っている人たちしかそこに入れないような空間

「公共空間」

一定の条件さえ満たせばだれでも自由に入ることができ、その結果として(見知らぬ人同士)と一緒に居合わせている空間

見えない社会をみる

①G.Simmelの教え



Georg Simmel
(1858~1918)ドイツ

「多くの諸個人が(相互作用)に入るとき、そこに社会は存在する」

ジンメル『社会学』(上、居安正訳、白水社、1994、15頁)

・社会科学の対象となる現象(たとえば、経済や政治など)と文化的現象(たとえば、芸術や宗教など)は、まぎれもなく「社会的」な性質をもっている。



これらの現象は、天(もしくは、神)から与えられたものでも、また一人の個人がすべて作り出したのでもなく、人びとが相互にかかわりあっていること、これこそが「社会的」であることの本質にほかならない。

①最初に相互行為(作用)を主題化した社会学者の1人である
G.Simmelによれば、社会は確固とした実態ではなく、たえず形成されるプロセスのうち(=**社会化「社会形成」**)に存在するものである。

②このようなG.Simmelの考え方に習って、もし私たちが社会を見ようとするなら、目を向けるべき場所は人間と人間の「**間**」であろう。

見えない社会をみる

②E.Durkheimの教え



Émile Durkheim(1858~1917)
フランスの社会学者

「社会学とは諸制度およびその発生と機能に関する科学」である

(『社会学的方法の基準』(宮島喬訳、岩波文庫、1978年、43頁))

「集団によって定められたあらゆる信念および行為の様式」



「社会的事実」

- ・(個人にとっては外在的・拘束的な性質をもつ)
- ・(個々の人間には還元できない独特の性質を持つ=創発特性)

①「(犯罪は正常)なものである・・・犯罪行為が存在していることは正常な状態だ・・・およそ犯罪行為の存しないような社会はない」

『社会学的方法の規準』(150~153)

規準(秩序)により
犯罪が定義される。

②「われわれは、それを犯罪だから非難するのではなく、われわれが(非難)するから犯罪なのである」

デュルケム『社会分業論』(田原音和訳、青木書店、1971、82)

③ E.Durkheimに習い、私たちが社会を観察しようと思えば、(不適切)な出来事が生じている場面にこそ目を向けるべきであろう。

<補足>

「社会的反作用(social reaction)」

「犯罪(逸脱)の潜在的機能」

「逸脱」行動は、個々人の素質的、環境的なものが原因ではなく、ある行動を「逸脱」と判断する人が、その行動をする人びとに対して逸脱者、反社会人というラベルを貼るのが原因だというラベリング学説。

代表的研究者(C.W.MillsやErving Goffman、Howard S. Becker)

・「ラベリング・セオリー」(烙印やレッテル)

Howard S. Becker によれば、「逸脱」は個人や行動の本質とは何ら関係なく、社会的状況全体のなかで彼らがもっている**相対的な力関係**によって決定される。

つまり、「この観点からすると、逸脱は、ある人が行なった行動の性質では**＜なく＞**、むしろ他人が「違反者」に適用する規則や制裁の**結果**である。

(Howard S. Becker, *Outsiders* New York, Free Press,1963)

見えない社会をみる

③ M.Weberの教え



Max Weber(1864~1920)
ドイツの社会学者

「社会学」とは「社会的行為を（解釈によって理解）
するという方法で社会的行為の過程および結果を（因果的に説明）しようとする科学を指す」

M・ウェーバー『社会学の根本概念』（岩波文庫、1972年、8頁）

①不適切な出来事に目を向けるとき、M.Weberのいう「**価値自由**」は重要である。「価値自由」とは、対象に対する「事実認識」と、その対象を評価する「価値判断」を区別するとともに、社会学者が研究対象を選択する際に自らの価値観が関与していることを認め、それを自覚し、それにとらわれず、事実を認識することである。

M・ウェーバー『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』（富永祐治・立野保男訳・折原浩補訳、岩波文庫、1998年参照）

『社会学事典』によれば、

「人間を価値判断の主体とし自覚し、そうなるがゆえに、自分の価値判断を可能なかぎり鮮明にすることによってその価値判断を自覚的に自己統制していくという、**価値判断排除、没価値性**というよりは**価値自由な立場を確立**したのは、M.Weberである」。

（見田宗介・栗原彬・田中義久編『社会学事典』弘文堂、1988、149頁）

②M.Weberは学問に対する姿勢として「価値自由」を強調した。
その理由は、「不適切」な出来事に対して人々と一緒になって対象を非難することではなく、人々がある対象を非難しているという事実を観察し、人々がその対象を非難する背後にある規則を探り、そのような規則に従って成り立っている社会の仕組みを明らかにすることが、社会学の課題であると考えたからである。

社会を観察する

「どこ」=

G.Simmel

目を向けるべき場所= 人間と人間の「間」

「いつ」=

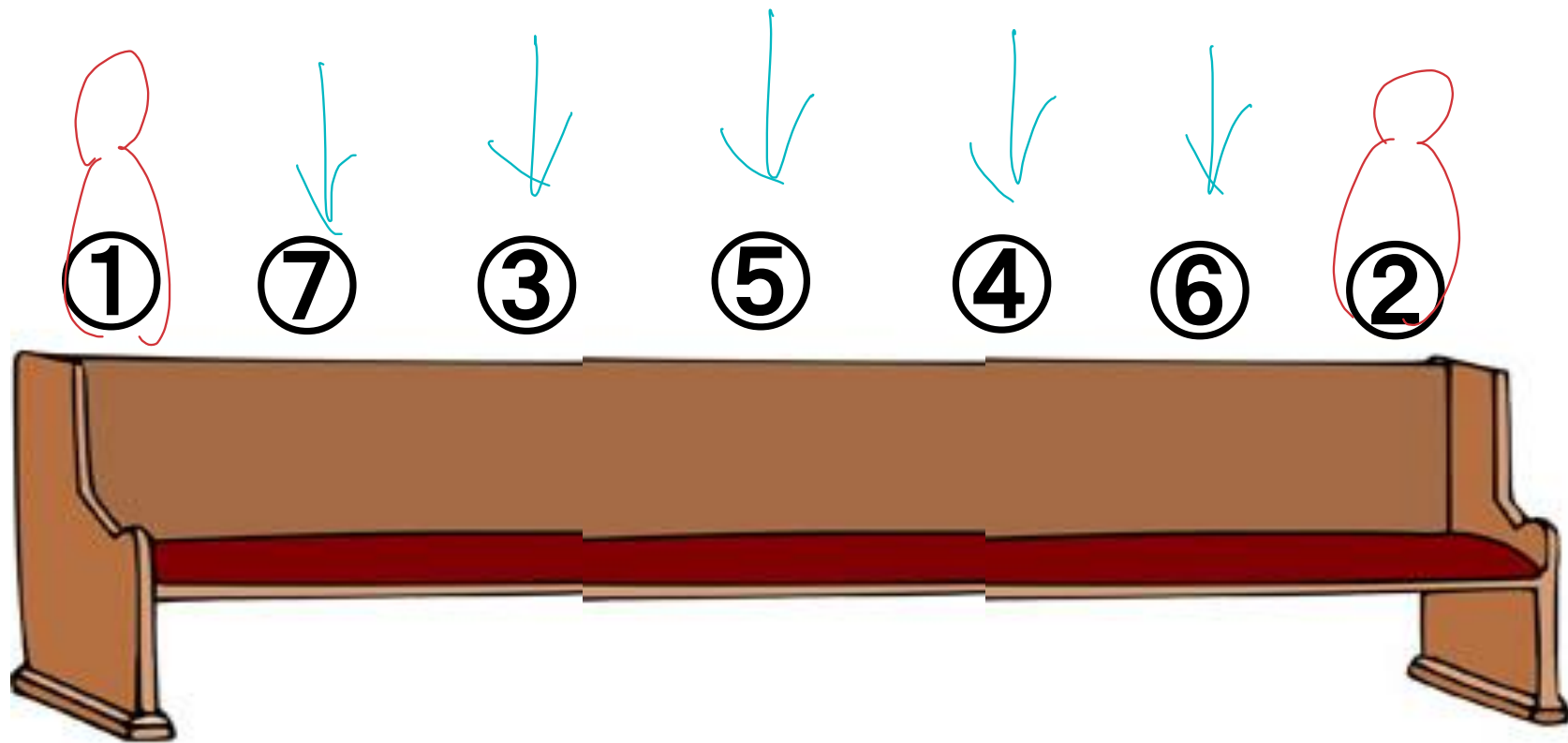
E.Durkheim

（不適切な出来事）が生じているとき

「いかに」=

M.Weber

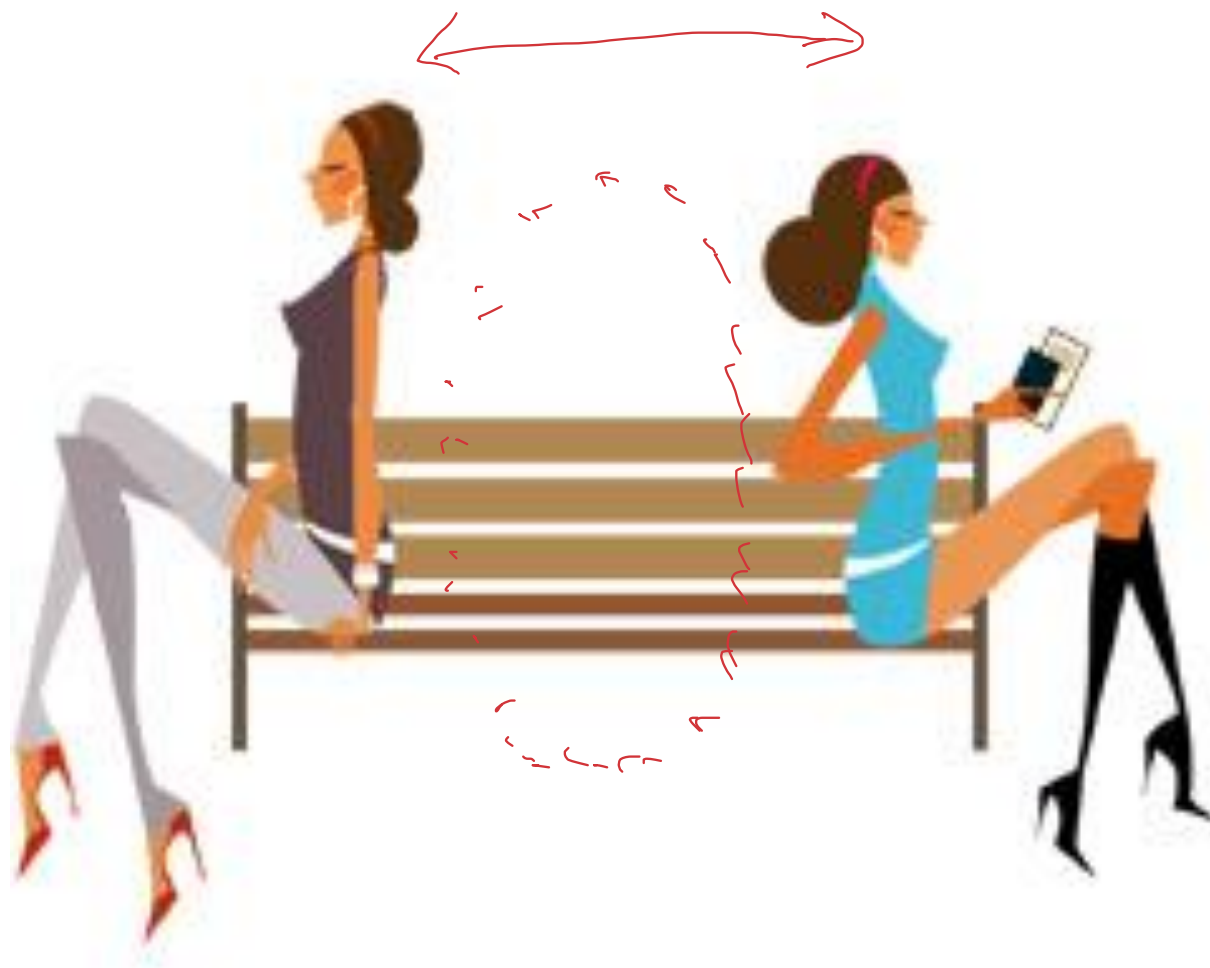
「価値自由」= 自らの価値観を自覚すること



①



②



「プロクセミックス」 (proxemics; 近接学)

「人間は空間をどのように利用しているか」を説明するために、動物行動学からヒントを得た概念。

動物の場合 「逃走距離」(動物によって異なる)

「臨界距離」(逃走距離と攻撃距離の間)

「攻撃距離」(逃走を止め、対象に反撃)

「プロクセミクス」

(proxemics; 近接学)

「人間は空間をどのように利用しているか」

Hall, E.T『かくれた次元』(日高敏隆他訳、みすず書房、1970)

人間の対人距離に関する意識

② 個人距離

(personal distance)

友人や仲間同士

③ 社会距離

(social distance;)

仕事関係・社交的な会話

泡

45～120cm

120～360cm

360cm以上

45cm以内



① 密接距離

(intimate distance)

親子・夫婦・恋人

④ 公共距離

(public distance)

講義や講演会

「儀礼的無関心」

(civil inattention/ civil indifference)

「現代の大都市においては、自分以外の人間は「知り合い」と「知らない人」に分類されるようになった。個々人はそういった知らない人に対して多くの場合「無関心」に振る舞わなければならない。これを「市民的無関心civil indifference」とも呼ぶ。この市民的無関心、つまりよけいなコミュニケーションをしないことこそ、都市生活を可能にしている相互行為上の条件なのである」

⇒「密接距離」や「個人距離」のなかに見知らぬ他人が入り込んでいるとき、儀礼的無関心を演じる。

そこで行われることは、相手をちらっと見ることは見るが、その時の表情は相手の存在を認識したことを表す程度にとどめるのが普通である。そして、次の瞬間にすぐに視線をそらし、**相手に対して特別の好奇心や特別の意図がないことを示す。**

Goffman.E『集まりの構造』(丸木恵祐他訳、誠信書房、1963＝1980年、94頁)

公共空間で見知らぬ他人にあからさまに関心を向けることだけでなく、他人に対してまったく無関心であることもまた不適切とされる。

儀礼的無関心はあくまで無関心であることを装う**一種の演技**であり、本当に無関心であることとは異なる。

都市における相互行為の特徴 (儀礼的無関心; 仮面をかぶる)

R.Sennettは、都市を「**見知らぬ者同士が出あう共同社会**」にとらえた。

他人からの干渉をうけずに、他人とのつきあいを楽しむ行動。仮面をかぶるのが、市民的であるには不可欠である。仮面をかぶることによって、力、弱さ、個人的感情は一切切り離され、純粹なひとづきあいができるようになる。⁽¹⁾

さらに、Z.Bauman は次のようにいう。

「見知らぬ者同士は、・・・出会いがそうであったように、**別れも突然おとずれる**。見知らぬ者同士は、見知らぬ者にふさわしいかたちで出あう・・・『**公的仮面をかぶる**』とは・・・他者との交流や関わりから身をひく孤立主義や『**真の自我**』の隠蔽主義ではなく、**社会参加、共同参与といった行為のことだ**」⁽²⁾

(1) リチャード・セネット (Richard Sennett, 1943年～) *The Fall of Public Man*, (Cambridge University Press, 1977、北山克彦・高階悟訳『公共性の喪失』(晶文社, 1991年)

(2) ジークムント・バウマン (Zygmunt Bauman) 『**リキッド・モダニティー** 液体化する社会』(森田典正訳、大月書店、2001)

平成25(2013)年度 駅と電車内の迷惑行為ランキング

順位 (昨年)	迷惑行為項目	割合(%) (昨年)
1(1)	騒々しい会話・はしゃぎまわり等	35.3(34.8)
2(2)	座席の座り方	30.7(28.9)
3(4)	乗降時のマナー	26.7(26.5)
4(5)	携帯電話・スマートフォンの着信音や通話	25.8(24.8)
5(3)	ヘッドホンからの音もれ	24.1(26.6)
6(8)	荷物の持ち方・置き方	20.5(17.0)
7(7)	混雑した車内へのベビーカーを伴った乗車	17.9(17.1)
8(6)	ゴミ・空き缶等の放置	17.8(18.1)
9(10)	車内での化粧	16.9(16.5)
10(9)	電車の床に座る	15.9(16.6)

(11位以下は省略)

【調査概要】 ○調査期間 2013年10月1日(火)～11月30日(土) ○内 容 駅と電車内のマナーに関して

○調査方法 当協会ホームページにて実施 ○回答総数 2,913人

【出典】「民鉄協ニュース25」(No.13,2013,12,20)財団法人日本民営鉄道協会

「違背実験」(Garfinkel)

①カーフィンケルは、日常生活の常識的な活動を支えているわれわれの常識的態度をあえて動揺させてみることで、親密な空間(家庭)における相互作用の特徴を明確にしようとした。

②「違背実験」または「期待破棄実験」と呼ばれるものを実施した。
(家庭のなかでしばらく下宿人のようにふるまってみる)

③実験結果

・家族成員は困惑・怒り・反感といった社会的感情をあらわにしたり、「はじめから冗談だとみなし、学生が下宿人としての態度を取り続けたにもかかわらず、冗談との態度をかえようとしなかった」り、「学生がとても良い子になったと感じ、きっと何かほしい物でもあって、そのうちそれを言ってくるだろうと勘繰った」り、したという。

Garfinkel, H『日常生の解剖学』(北澤裕他訳、マルジュ社、1989年)。

・カーフインケルによれば、われわれの相互行為秩序は、あらかじめ共有されたルールによって達成されるものではなく、いわゆる「**背後期待**」を想定して振る舞い、かつ他者の反作用を理解することをおして遂行される相互行為によって、その都度構築されるのである。

・つまり、日常的な場面の背後にあるとされている期待が共有されている、もしくは相互に理解されているからこそ、日常会話（行動）が「当たり前」に進行するのである。

以上のように、性格を異にする相互作用のあり方を「公共空間」と「親密空間」という2種類の空間でそれぞれ発見することができた。